

看護基礎教育と新人看護職員研修の連携と今後の課題

岩佐幸恵¹⁾ 木田菊恵²⁾ 高開登茂子²⁾ 近藤佐地子²⁾
奥田紀久子¹⁾ 宮崎久美子¹⁾ 安原由子¹⁾

¹⁾徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 ²⁾徳島大学病院看護部

1. はじめに

徳島大学病院では平成22年度に文部科学省「看護師の人材養成システムの確立」事業に採択され、大学病院看護部と医学部保健学科の間で人事交流を行い、看護師の教育力の向上と看護教員の実践力の向上を図っている。

一方、日本看護協会の病院看護実態調査によると、平成22年度の新卒看護職員の離職率は8.1%で、新人看護職員の1割弱が1年以内に離職しており、離職防止が看護界の喫緊の課題となっている。新人看護師の離職の原因は、看護基礎教育の終了時点での臨床能力と看護現場で求められる能力のギャップだと考えられている。

そこで、発表者らはこのギャップを埋めるべく、大学病院で行われている新人看護職員研修に参加し、そこで得られた情報をもとに、発表者らの学部担当科目である「看護技術Ⅰ～Ⅳ」の授業改善に取り組んでいる。また、大学病院からは、人事交流の一環として教育担当者が「看護技術Ⅰ～Ⅳ」に参加している。

2. 新人看護職員研修の内容

徳島大学病院では入職時のレディネス調査に基づいて、不足している標準的基本技術や態度などの機能別研修を4月の集合教育で行っている。その後、部署教育で臨床応用し、複雑・難解な課題に対するフォロー研修を適宜行い、1年間で修了する。

3. アンケートの結果から

アンケートは、平成24年5月25日に実施した。対象者は新採用研修に参加した76名（本学卒業生20名）であった。なお、研修参加者には、研修中に実施したアンケート等を、研究発表に使用することについて同意を得ている。

対象者の専門学歴の内訳は、大学45名、専修学校3年課程25名、短期大学3年課程1名、高等学校専攻科1名、専修学校2年課程1名、無回

答3名であった。アンケートの内容は、看護技術に関して①学校で学習したと違っていたことは何か、②学生時代に学習の機会があったほうがよかったことは何か、③病院に就職しないと学べなかったことは何か、④学校での技術教育に関しての意見で、回答は自由記述とした。

学校で学習したと違っていたことは、注射に関する記述が13件と最も多く、次いで、採血に関すること(8件)、気道吸引に関すること(8件)、導尿に関すること(7件)であった。相違点としては、「学校では注射器と注射針(直針)により採血を行っていたので翼状針で採血を行うことに戸惑った」など翼状針の使用(5件)、「点滴ラインを作るとき、クレンメの位置を滴下筒の真下まで持っていくと学校では習ったけれど、動かさなくてもよいと言われた」(4件)が多かった。

学生時代に学習の機会があったほうがよかったことについては、静脈注射・点滴に関すること(23件)が最も多く、その中でも特に輸液ポンプ・シリンジポンプ(9件)が多かった。また、学生間での、筋肉・皮下注射(8件)、採血(5件)など、シミュレーターではなく実際の人間で実施する機会が必要だという意見もあった。看護技術以外の項目ではあるが、夜勤の体験(5件)や複数患者の受け持ち(2件)、勤務シフトごとの申し送り(2件)など、統合実習*に関する内容も書かれていた。また、「一通りのことは学校で学んだと思うが、1～2年で学んだことだったので、最終学年でもう一度学習の機会があったらよかった」という意見もあった。

病院に就職しないと学べなかったこととしては、「生身の人間にケアを実施するので、学校で習うことよりも数倍リアルな体験をしていると思います」「全部、学んだことでも現場に出てプレッシャーなどがかかると全然違う行為に思えてくる」など、実際の人間でないと経験できないという記述が14件で最も多かった。点滴に関すること(11件)、採血に関すること(10件)の他に、

職場での人間関係・コミュニケーション (6 件) もあげられていた。

学校での技術教育に関しての意見には、「臨床実習の内容をもっと充実させてほしい」「技術をもっと練習したい」「統合実習をもっと取り入れてほしい」「物品や手技はどんどん新しくなっているので、その時の最新のやり方を学校でも教えてほしかった」などがあつた。

4. 授業改善の取り組みと今後の課題

新人看護職員研修との連携による授業改善は始まったばかりである。しかし、いくつかの新しい取り組みを行っている。臨床での実施頻度が高いが教育内容に組み込めていなかったトレイ型完全閉鎖式導尿システムや看護診断 (NANDA) を、本年度より授業に取り入れた。また、学内実習では、より臨床に近い物品や方法をとるよう改めた。そして、病院の教育担当者に授業に参加してもらい、臨床の知と技を学生に伝授している。

また、アンケート調査からもわかるように、採血と注射に関するニーズは高く、教育内容の充実が必要である。発表者たちの授業では、病院の教育担当者やスキルス・ラボの協力を得て、実際に学生間での採血を実施しているが、注射に関してはシミュレーターだけで、学生間では実施していない。しかし、皮下注射や筋肉注射も学生のうちに体験したかったという要望は強く、今後は、学生の安全を確保しつつ、学生間の注射についても検討していく必要があると思われる。

さらに、実習の充実、特に統合実習の充実も重要である。臨床実習の質を高めるためには、実習施設で学生の指導にあたる看護職員である実習指導教員や、専任教員としてカリキュラムの全体像を把握し、かつ最新の知識・技術をもって主体的に臨地教育にたずさわるような、実践と教育を兼務する臨地教員など多様な人材の導入も必要ではないかと考えている。今後の人事交流の発展に期待したい。

*学習した内容をより臨床実践に近い形で学習し、知識・技術を統合する学習分野である。具体的には、卒業後、臨床現場にスムーズに適応することができることを目的とし、臨地実習においては、複数の患者を受け持ち、一勤務帯を通した実

習を行うこと、また、夜間の実習も可能な範囲で実践するなど、臨床実践の中で必要な基礎的な知識と技術を統合的に体験する。

学生時代に学習の機会があつたほうがよかつたこと

(件数)

静脈注射・点滴に関すること(23)

輸液ポンプ・シリンジポンプ(9)

静脈注射(ワンシヨット)(4)

点滴(4)

静脈留置針(3)

安全装置付き翼状針(1)

点滴のミキシング方法(1)

三方活栓の仕組み(1)

採血に関すること(12)

学生間の採血(5)

採血(4)

真空管採血(2)

学生間の簡易血糖測定(1)

皮下注射・筋肉注射に関すること(8)

学生間での筋肉注射・皮下注射(7)

皮下注射・筋肉注射(1)

導尿(4)

導尿(2)

膀胱留置カテーテル(2)

モニター管理(4)

吸引(3)

吸引(2)

学生間の吸引(1)

座薬(2)

指示書の見方(2)

その他

もっと練習時間がほしかった(2)

看護記録(1)

看護診断(NANDA)(1)

最終学年での技術に関する学習の経験(1)

看護技術以外

夜勤の体験(5)

複数患者の受け持ち(2)

申し送りの経験(2)
